

⑭「大東亜戦争」(太平洋戦争) ―戦闘事例―

※ノモンハン事件(1939年)

- 第一次ノモンハン事件
 - ◆ 1939年5月11日、ハルハ河にて外モンゴル軍と満州国軍との間で武力衝突。
 - ◆ 「満ソ国境紛争処理要綱」
 - ◆ 5月24日、第23師団(小松原師団長)の山県支隊の搜索隊200名が全滅し、撤収。
- 戦闘の問題点 [戸部、寺本、鎌田ほか、66-8]
 - ① ベテランの戦死と自決(部隊長・連隊長)
＝価値ある体験をその後に生かす道を閉ざしてしまいますことを意味する。
 - ② 過度の精神主義(日本) ⇄ 物量主義(ソ連)
 - ③ 中央と現地のコミュニケーションの欠如

(1) 緒戦の攻勢―真珠湾・マレー・珊瑚海―

- 真珠湾攻撃 (辻田、72頁)

「日本側にとって最大の誤算は、撃沈したはずの戦艦が『復活』したことだった。真珠湾はむしろ浅瀬であったため、米海軍は撃沈された戦艦を引き上げ、修理・改装し、戦線に復帰させてしまったのである。」

大本営発表(海軍部)→9隻(うち、撃沈5)、実際→8隻(うち撃沈・着底4)

※その差の一隻は旧戦艦の標的艦「ユタ」を現役の戦艦と誤認 ほぼ正確
- マレー沖海戦 (辻田、74頁)

マレー半島東岸を航行中の英国東洋艦隊主力に対し、数次の空爆を実施

→戦艦「レパルス」、戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」(最新鋭の戦艦)を撃沈。

※重装甲の戦艦は停泊中や故障中に奇襲でも受けられない限り、沈まないとされていた。
- 珊瑚海海戦(1942.5.7～5.8) (辻田、105頁)

「東南アジアを制圧した日本軍は、次なる戦略目標を米豪間の交通路の遮断に定めた。米軍反攻の拠点となりうるオーストラリアを孤立させようという目論見」

→ニューギニア南東の要塞、ポートモレスビーを攻略する作戦

※既にニューギニア島の一部を占領していたが、同島は東西にオーエン・スタンレー山脈が横切っているため、海上から陸軍部隊を上陸させることに

同年4.30 ラバウルより、輸送船団(陸軍部隊が乗った)+空母「祥鳳」を含む護衛部隊(ニューギニアを時計周りに、珊瑚海を経由してポートモレスビーに向かう)

同年 5.1 トラック島より、空母「翔鶴」「瑞鶴」を中心とする機動部隊
米海軍 空母「レキシントン」「ヨークタウン」を中心とする米豪連合の部隊

【結果】日本、はじめて空母を失う。「祥鳳」（潜水母艦を改造した小型空母）失う
(辻田、106 頁)

アメリカ、「レキシントン」（正規空母）失う。

日本海軍、ポートモレスビー作戦の攻略中止。

※大本営発表、日本が勝利のように見える？ 米海軍、戦艦 1、空母 2 を失ったと発表。
その後の追加戦果で「祥鳳」の沈没が発表。空母「レキシントン」1 隻撃沈したに
過ぎなかった。(日本海軍の戦果；主力艦)
→大本営発表では「サラトガ」や「ヨークタウン」に取り換え (辻田、107－108 頁)

(2) 転換—ミッドウェーとガダルカナル

● ミッドウェー作戦

※ミッドウェー作戦はアリュेशन攻略作戦と並行して実施されたため、本作戦
には連合艦隊の決戦兵力のほとんどが動員。山本連合艦隊司令長官のもとに艦船
約 200 隻（総トン数 150 マン t）、航空機約 700 機。その中でも第一機動隊（司令
官；南雲忠一第一航空戦艦隊司令長官）が作戦の主役（南雲司令官指揮のもと、第
一航空戦隊・第二航空戦隊の空母 4 隻を中心とする）

(戸部・寺本・鎌田ら編、75－76 頁)

- ◆ 山本権兵衛の作戦構想（短期決戦、奇襲により、相手を守勢に追い込み、士気の
低下を促す。）

⇒軍令部（漸減邀撃）航空決戦による米空母の誘出撃滅作戦の目的や構想が南雲司
令官をはじめ、軍令部、連合艦隊の幕僚陣にも共有されたと言い難い。

「ミッドウェー攻略」の誤解（戸部・寺本・鎌田ら編、73・101 頁）

- ◆ ミッドウェー海戦、空母 4 隻喪失（辻田、112 頁；戸部・寺本・鎌田ら編、77・106 頁。）
米海軍は暗号を解読。日本海軍の行動を察知。

（日本海軍が用いていた戦略常務用の「海軍暗号書 D」）

空母「エンタープライズ」「ホーネット」「ヨークタウン」を中心とする機動部隊

※「ホーネット」は日本本土空襲に利用された空母

※ダメージ・コントロール；「ヨークタウン」は珊瑚海海戦で被害を受けた空
母→修理・復帰

①米海軍の奇襲。

(日本の空母では攻撃機の兵装を爆弾から魚雷に転換している最中)

日本の空母 3 隻「赤城」「加賀」「蒼竜」、炎上・戦闘不能

②被害から免れた空母「飛竜」による反撃、「ヨークタウン」大破。

③「飛竜」も米海軍の攻撃により沈没

大本営発表 「エンタープライズ」「ホーネット」の撃沈 (辻田、115 頁)

日本の損害は空母一隻喪失、空母一隻大破 隠蔽？

- ガダルカナル作戦

- ◆ 制海権の確保 (辻田、122・124・127 頁)

→兵力増強や補給に有利。 失った側は食料の確保の困難、飢え死にする可能性

ガダルカナル島周辺の制海権を巡った海戦；第一次ソロモン海戦、第二次ソロモン海戦、サボ島沖海戦、南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦、ルンガ沖夜戦など

(例) 第一次ソロモン海戦の戦果

日本側；重巡洋艦 9 隻撃沈、軽巡洋艦 4 隻撃沈

→実際は重巡洋艦の撃沈数 4 隻、軽巡洋艦を合わせると 3 倍以上の水増し。

※米軍の「ホーネット」の撃沈、「エンタープライズ」の大破に成功したが、日本海軍は空母の沈没はなかったものの、優秀なパイロットを多数失う。→未熟なパイロットの証言による戦果確認に依存せざるを得ない。

- ◆ 米豪遮断作戦；陸海軍部で妥協した要地獲得目標 (戸部・寺本・鎌田ら、109 頁)

①FS 作戦 (ニューカレドニア・フィジー・サモア)

②MO 作戦 (ポートモレスビー)

→海軍は FS 作戦の前にミッドウェー・アリュेशन攻略作戦を提案し、陸軍に部隊派遣要請。(一木連隊 3000 人) しかし、FS 作戦はミッドウェーでの敗北により一時中止。現地海軍部隊は FS 作戦の中止が決まるより前にガダルカナルに飛行機建設 (米豪遮断作戦のため)

- ◆ 大本営陸軍部の希望的観測 (戸部・寺本・鎌田ら編、111－112 頁。杉之尾、189 頁。)

→1942 年 8 月 7 日、米軍のガダルカナル島上陸。大本営陸軍部内の認知度の無さ。

→米軍の反攻開始は 1943 年以降であるという希望的観測により、米軍の上陸は偵察作戦か飛行場破壊作戦である可能性が高いと判断し、米軍の上陸兵力を過小評価 (海軍は輸送船の数などから、アメリカ軍の上陸兵力を 5000 人程度と判断→陸軍には 2000 人程度と伝える。)。ガダルカナル島奪回兵力は小さくても早く派遣できる部隊が良いとした。

→8月10日、一木支隊2000人は第一七軍の指揮下に入り、ガダルカナル島の奪回を命じられる。

一木支隊の先遣隊900人だけで奪回。それから後続部隊は22日大型輸送船二隻で送り出す予定であり、さらに川口支隊（川口清建少将）が28日に増派予定。

- ◆ 「ねずみ輸送」（戸部・寺本・鎌田ら編、118頁）

ガダルカナル島付近の制海権×＋第二次ソロモン海戦（米航空母艦「エンタープライズ」大破、日本側は空母「竜驤」沈没。一木支隊第二梯団を護衛していた第二水雷戦隊の一部損害。

→「大規模増援」（昼間の輸送船による）から「逐次連続輸送」（夜間、高速の駆逐艦による）

- ◆ ガダルカナル島からの「転進」（戸部・寺本・鎌田ら編、134－135頁。辻田、140頁。）

※「転進」；陸軍省軍務部長の佐藤賢了少将（元陸軍報道部長）と、参謀本部第二部（通称、情報部）長の有松精三少将の合作と言われている。

→日本軍は約3万2000人の兵力をガダルカナル島に送る。

日本軍；戦死者1万2500余人、戦傷死1900余人、戦病死は4200余人、行方不明は2500人

米軍；6万人のうち、戦死者は1000人、負傷者は4245人 餓死者はいない。

※日本海軍の損失（ガダルカナル島をめぐる起きた数次にわたる海戦と船団護送で艦艇56隻沈没、115隻損傷（駆逐艦の沈没が19隻、損傷が88隻）、飛行機の損失約850機

(3) 破滅—インパール・レイテ

- インパール作戦（1944.3）

※「日本軍は、一九四二年五月に英領ビルマを占領。それ以降、インドに退却した英軍と国境で対峙していた。ただ、一九四三年になると英軍は戦力を徐々に充実させ、反攻の機会をうかがうようになった。これに危機感を覚えた現地の第十五軍は、英軍の前線拠点であるインパールの攻略を主張し、大本営に受け入れられた。」（インパール作戦）、インドの独立運動家チャンドラ・ボース率いるインド国民軍も参加（辻田、182頁）

- ◆ 二一号作戦（東部インド進攻作戦） 戸部・寺本・鎌田ら、142－143頁

大本営：ビルマ攻略作戦の成果を勢いにインドの国内情勢の動揺に応じて、

東部インドへの進撃（蒋介石政権の屈服とイギリスの没落を目的として）

現地の不同意（雨季；5月～9月にかけて、峻険な山系や大河の障害）

※ビルマ防衛；第十五軍・第一八師団（師団長牟田口廉也中将）

- ◆ 連合軍のビルマ奪回（戸部・寺本・鎌田ら編、144・146頁）

第一次アキャブ作戦；1942年10月以降、英印軍がビルマの南西沿岸アキャブ方面に進出。翌年5月までに日本軍（第五五師団）が撃退したものの、航空戦力の南東方面（ソロモン、ニューギニア）への転用により、ビルマ上空の制空権も連合側に握られていることが明瞭となった。

⇒ウィングート旅団（英印軍の挺身部隊）

空中補給＋無線誘導による指揮→日本軍の占領地域内で戦線後方を攪乱

- ◆ 牟田口の第一五軍司令官就任→「攻勢防禦」によるビルマ防衛論

インパール攻略（連合軍の反攻の策源地）・アッサム進攻→「ウ号作戦」（急襲突進）、「必勝の信念」に欠けた態度として反省（二一号作戦の不同意に関して）、盧溝橋事件の当事者（連隊長）の自責（大東亜戦争までに進展してしまったこと）

- ◆ 作戦の不備（戸部・寺本・鎌田ら編、163・165・176頁）

①Contingency Plan（不足の事態に備えた計画）の認識の欠如、「必勝の信念」

②補給の軽視・不備（陸上交通←制海権、船舶事情）

③敵戦力の過小評価（円筒陣地、空中補給）

- ◆ 日本軍；参加人員約10万人。うち、戦死者は約3万、戦傷・戦病のために後送された者約2万、残存兵力約5万人のうち、半分以上が病人（戸部・寺本・鎌田ら編、141頁。）

- レイテ沖海戦（戸部・寺本・鎌田ら、213頁）

「作戦の目的は、本土と南方との間の資源供給路を確保するために、その連絡圏であるフィリピンへの米軍の進攻を阻止することであった。もし、フィリピンが米軍の手に落ちれば、南方からの石油その他の戦略資源は輸送不可能となる。」

[戸部・寺本・鎌田ら、179]

- ◆ 航空兵力の低下

①1944年6月19日、マリアナ沖海戦（「あ」号作戦）

→米海軍のレーダー（察知）、「マリアナの七面鳥撃ち」

日本の損害、海軍航空機の損害；400機（600機参加）

＋日本の空母「大鳳」「翔鶴」「飛鷹」喪失

[辻田、192－193；戸部・寺本・鎌田ら編、182]

②沖縄空襲（1944年10月10日）

日本軍は飛行機約 45 機（うち、海軍機 30 機）、艦艇 22 隻沈没など

[戸部・寺本・鎌田ら、191]

③台湾沖航空戦（1944 年 10 月 12 日～14 日）

→大本営発表。空母 11 隻、戦艦 2 隻など撃沈。空母 8 隻、戦艦 2 隻などを撃破。
無敵を誇った米機動部隊を壊滅させたと発表。しかし、米海軍は一隻も空母を失っていなかった。[辻田、198]

◆ サイパン島陥落＝「絶対国防圏」の崩壊

「捷号作戦」…4 つの区分（予想される決戦）

米軍、フィリピン攻略を目指して西進→レイテ島上陸 [辻田、206－7]

※日本軍の艦隊総戦力（戸部・寺本・鎌田ら編、179 頁）

戦艦 9、空母 4、重巡洋艦 13、軽巡洋艦 6、駆逐艦 31 連合艦隊艦艇の 8 割に相当日本、空母 4、戦艦 3 を失う。（その中に真珠湾攻撃以来の殊勲艦、空母「瑞鶴」や最新鋭の戦艦「武蔵」も） 米国、護衛空母 2 と改造空母 1 などを失うのみ。海軍報道部、空母 8 撃沈、空母 7+戦艦 1 撃破 日本側は空母 1+戦艦 1 を喪失と報道。 [辻田、206－7; 戸部・寺本・鎌田ら編、179-181]

◆ レイテ海戦（戸部・寺本・鎌田ら編、213・219 頁）

①航空兵力の再建前に、レイテに上陸した米軍を「撃滅」し、フィリピンを確保するという作戦目的を遂行しようとしたこと。パイロット育成の速成困難

②4 つの日本艦隊（栗田・西村・志摩・小沢）の間の通信連絡の不備

例）シブヤン海戦（1944.10.24、栗田艦隊：栗田健男）

主力戦艦「武蔵」喪失

航空攻撃日（悪天候、機のパフォーマンス、優秀なパイロットの不足）→「反転」

表 栗田艦隊の「反転」；栗田艦隊と連合艦隊司令部との間の不信感（通信不調）

| 栗田艦隊 | | 連合艦隊司令部 |
|-----------------------|-------|---------------------------|
| 「反転」 | 15:30 | |
| 「反転」を報告 (司令部、各艦隊へ) | 16:00 | |
| 「再反転」(報告せず) | 17:14 | |
| | 18:13 | 「天佑を確信し全軍突撃せよ」 |
| | 18:55 | 栗田長官からの最初の 「反転」に対する報告電 |
| | 19:55 | 栗田艦隊に対して突撃命令 |

戸部良一・寺本義也・鎌田伸一・杉之尾孝生・村井友秀・野中郁次郎（1991）『失敗の本質』
中公文庫より 204～206 頁より作成

③ 「謎の反転」（25 日）；レイテ作戦の事実上の中止

「大和」艦上の長官は、隊形を整えるため、全艦隊をレイテ島とは逆に北上に
集結させた。集結を終えた栗田艦隊は再び南下。12 時過ぎに敵から空襲。
→栗田長官はレイテを直前に反転を命じる。（「謎の反転」といわれる）

[戸部・寺本・鎌田ら編、209]

(4) 終戦

● 沖縄戦→硫黄島とともにただ 2 つの国土戦

- ◆ 1945 年 4 月 1 日～6 月 26 日 （戸部・寺本・鎌田ら編、222 頁）

日本軍；牛島満陸軍中将率いる第三二軍将兵約 8 万 6400 人

米軍；バックナー陸軍中将率いる米第一〇軍将兵約 23 万 8700 人

[戦死者数]

日本軍 約 6 万 5000 人 日本側住民約 10 万人 米軍 1 万 2281 人

- ◆ 上級司令部（大本営・参謀本部など）と現地三二軍との間に作戦用兵思想の乖離
→航空決戦に寄与する攻勢作戦か本土決戦準備のための戦略持久戦にあるのか。

[戸部・寺本・鎌田ら編、223 頁]

- a. 第三二軍から第九師団が抽出される⇒2.5 個師団（約 2/3 に縮小）

中頭地区を放棄し、軍主力を島尻地区に集約。（北・中飛行場の占領の恐れ）

[戸部・寺本・鎌田ら編、232-3 頁]

- b. 「天号作戦計画」

「この天号航空決戦の完遂のためには、沖縄本島の航空基地の確保が不可欠の要

件であったが、日本の航空戦力に天号決戦を遂行しうる主体的力量はないと判断する第三二軍は、地上戦重視の出血持久作戦の方針を変更しようとはしなかった。このため戦術的には、大本営等が確保を強く望んでいた北・中飛行場を、主陣地外に放置することになった。」[戸部・寺本・鎌田ら編、238 頁]

- ◆ 米軍、嘉手納飛行場（北）・読谷^{よみたん}飛行場（中）占領。
 - 大本営海軍部・連合艦隊司令部、現地三二軍が北・中飛行場を確保し、航空部隊の米艦船攻撃の好機を作り出すことを希望していた。そのため、両飛行場の奪回、「攻勢」を要求。
 - ⇒三二軍、持久作戦（八原博通大佐の上級司令部への疑念；航空戦力の実態・航空作戦の経歴）
 - 牛島軍司令官、攻勢発動の日時を4月7日夜と決定。第三二軍高級参謀の八原博通大佐（作戦主任）に攻撃計画の策定
 - 第三二軍は、上級司令部などの攻勢要望に押され、二度まで攻勢転移の命令を下したが、米軍輸送船団の近迫の報によりいずれの攻勢も実施されなかった。
 - [戸部・寺本・鎌田ら編、244-245・248-249・252-253・259 頁。有馬、330 頁]
- インパール作戦中止とサイパンの陥落→東条に内閣総辞職
(戸部・寺本・鎌田ら編、174 頁。有馬、327 頁)
 - 小磯国昭内閣、「繆斌工作」（繆斌；汪兆銘政権の考試院＝立法院副院長）
南京政府を即時解消＋蒋介石政権と停戦撤兵 交渉
賛成；小磯首相・緒方竹虎情報局総裁⇒反対；重光葵外相・外務省
最高戦争指導会議でも陸海外の三相の反対。天皇も小磯の上奏を退ける。
- 1945 年 （筒井、231 頁・251-252・256-260 頁）
 - ◆ 6 月 8 日、御前会議（本土決戦方針）
 - ◆ 6 月 22 日、秘密御前会議、昭和天皇自らの発意で「懇談会」と称す。
 - 軍事と並行し、外交を行うように指示。
 - ※7 月 13 日、鈴木貫太郎内閣はソ連に対して和平の仲介。ソ連は対日参戦をアメリカに約束
 - ◆ 7 月 27 日、ポツダム宣言受諾；「無条件降伏」か「有条件降伏」か
 - 日本軍の無条件降伏。「条件」として保障占領・武装解除・戦争責任の処罰など

- ◆ 8月6日、広島への原爆投下
- ◆ 8月9日、ソ連の対日参戦
- ◆ 8月9日、長崎への原爆投下
- ◆ 8月10日、第一回御前会議

→四条件（国体護持・自主的武装解除・自主的戦犯処罰、保障占領拒否；天皇制の存続）阿南惟幾陸相・梅津美治郎参謀総長・豊田副武軍令部総長

一条件（国体護持） 米内光政海相、東郷茂徳外相・平沼騏一郎枢相

→「聖断」 ポツダム宣言の条件付き受諾。
（「天皇の国家統治の大権」を変更しない条件）

- ◆ 8月14日、第二回御前会議

※12日の連合国の回答文

①降伏後、天皇及び日本政府の国家統治の権限は、連合国最高司令官の制限の下に置かるるものとす。（subject to；「隷属」「従属」を下線部のように意識）

②最終的の日本国の政府の形態は、ポツダム宣言にしたがい、日本国民の自由に表明された意思によって決定せらるべきものとす。

陸海軍の両総長は受諾反対の上奏。「国体の護持」をめぐって。

第二回御前会議→受諾反対（陸相・両総長） 二度目の「聖断」

- ◆ 8月15日、玉音放送

(4)「大東亜戦争」の中の「支那事变」

参考文献

1. 辻田真佐憲『大本営発表—改竄・隠蔽・捏造の太平洋戦争』幻冬舎、2016年
2. 杉之尾宜生『大東亜戦争 敗北の本質』ちくま新書、2015年
3. 戸部良一・寺本義也・鎌田伸一ほか『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』中公文庫、1991年



図 1-11 捷号作戦展開図 福田幸弘『連合艦隊』より